

# 塩谷都市医師会だより

## Contents

平成21年度第3回役員会  
塩谷都市医師会学術講演会報告  
地域医療を守る！  
シリーズ「塩谷医療史」-3-

社団法人 塩谷都市医師会  
広報委員会

〒329-1312  
さくら市桜野1319番地3  
さくら市氏家保健センター内  
TEL 028(682)3518  
FAX 028(682)5760

## 平成21年度第3回役員会報告



平成21年12月7日(月)午後6時30分よりさくら市氏家保健センター医師会事務室にて開催された。

出席者：尾形会長・山田副会長・阿久津副会長・西・軽部・佐野・岡・半田・手塚・本間尾形新・池田監事・越井監事・糸川事務長

### 議題 救急医療体制の現状分析について

2市2町管内の消防署から今年4月から8月までの救急搬送の統計報告が配布された。4月から開院した国際医療福祉大学塩谷病院の救急受け入れがまだ低い状態であるが、少しずつ入院患者も増えているとの話があった。今後、塩谷病院の救急医療体制を含めた基幹病院としての機能向上のため、1月に運営協議会が開かれることになったことが尾形会長から報告された。

### 議題 新型インフルエンザ対応について

感染症担当理事の軽部先生より報告。新型インフルエンザワクチンが必要量の配布がないことや、10m1という大きいバイアルで使いにくい点などが出ているが、3月まで

は必要量が配布される見込みとのことで、県から集団接種の実施方法についての案内がきているとのことだが、全国的にも集団接種しているところはほとんどなく、今から実施するのは困難ではないかとの話だった。

一方、塩谷町の尾形新先生からは塩谷町では1歳から6歳の約400人の小児に4つの医療機関がワクチンを持ち寄って集団接種する予定との報告があった。

こども診療室担当の阿久津副会長から10月と11月の休日当番の患者受診状況の報告があった。11月22、23日の連休が新型インフルエンザのピークで、多い医療機関では140名の受診があり、またこども診療室も23日は43名の受診があったが、その後は減少傾向にある。しかし、まだ予断を許さない状況で、年末、年始の休日体制をどうするかについて議論された。その結果、年末年始の休日当番はそのまま、こども診療室だけ医師を1名から2名に増員することで調整することになった。

また、学校の出席停止期間について各医療機関で異なることについて質問があったが、厚生労働省もあいまいな通知しか出していないので、一概に決めるのは困難ではないかという意見や、最低限タミフルなどのインフルエンザ特効薬を服用中、熱や咳などの症状がある場合は欠席すべきだろうとの意見があり、集約できなかった。

塩谷都市医師会ホームページ/メール	広報委員会編集部	医師会事務局
URL <a href="http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/">http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/</a> メール <a href="mailto:shioya@tochigi-med.or.jp">shioya@tochigi-med.or.jp</a>	岡 一雄 <a href="mailto:r2d2@msh.biglobe.ne.jp">r2d2@msh.biglobe.ne.jp</a> 尾形新一郎 <a href="mailto:ogata@o-ga-ta.or.jp">ogata@o-ga-ta.or.jp</a>	糸川 <a href="mailto:shioya@triton.ocn.ne.jp">shioya@triton.ocn.ne.jp</a> 坂和 <a href="mailto:sakawa@e-shioya.jp">sakawa@e-shioya.jp</a>

## 議題 来年度の医師会の活動について

市民公開講座はさくら市が担当で、10月3日（日）に開催される。テーマは在宅医療で講師はがんの在宅ホスピスを行っている渡辺邦彦先生との報告があった。

シンポジウムについては、塩谷郡市医師会の選挙が4月に行われ執行部が変わる可能性があるため、現時点では春に行うのは困難ではないかとの意見がでて、次回の役員会で再検討することになった。

こども診療室は来年度も同様な形で継続することで承認された。

医師会総会は4月10日（土）に開催される予定となった。尾形会長から、後進に会長職を譲るため、次期会長選には立候補しない旨の報告があった。

## 地域医療を守る！

### 塩谷病院運営協議会開催される

国際医療福祉大学に継承された塩谷病院の基幹病院としての機能の改善を図るために、第1回国際医療福祉大学塩谷病院運営協議会が1月14日に開催された。協議会のメンバーは学校法人国際医療福祉大学、栃木県、地元住民代表、地元関係市町、塩谷広域行政組合、塩谷郡市医師会の代表ら合計21名で構成されており、医師会からは会長、副会長の3名が出席した。

会議の冒頭、塩谷病院から、平成21年4月から12月までの診療状況について説明があった。1か月間の外来患者数は4月が7359名、12月が9805名と約2500名増加、1日平均入院患者数は46名から96名に増加。施設の修繕や医療機器の購入、看護学校の状況についても報告があった。

その後の協議では、塩谷病院の外来・入院患者数は順調に増加していることに一定の評価が得られたが、塩谷管内の医療機関の救

急患者の受け入れが低く、管外の医療機関への搬送が多い状況を改善するためにも救急患者の受け入れ増加の要望が出された。これに対し、塩谷病院からは「全国的な医師不足から休日夜間に対応できるだけの医師が確保できていない、特に整形外科医の招聘が困難であり交通事故などの外傷が受けられないが今後も各方面から医師の確保に努めており、4月からは常勤医が現在の19名から2人程度増員される見通しであることが示された。

なお、塩谷郡市医師会としても塩谷病院が基幹病院としての機能のさらなる回復のためにどんな協力ができるかを今後とも検討していく予定である。会議は今後年1回行われる予定。

### 地域で支えよう地域医療 講演会

阿久津副会長講師として招かれる



1月24日、那須烏山市烏山公民館において地域医療講演会が開催された。この講演会は南那須地域医療を守る会と南那須地区広域行政事務組合の共催で、「塩谷地区の経験に学ぶ《地域医療の再生に向けて》」という題で、本会の阿久津博美副会長が医療費削減などの政策によって生じた日本の医療の疲弊と塩谷地区で経験したJA塩谷総合病院の移譲をめぐる地域医療の混乱と崩壊、その後の再生に向けた動きなどについて講演を行い、160名の地域住民は熱心に耳を傾けた。

▶「開業医が知っておくべき

ヘリコバクターピロリ感染症の知識」

日時：平成21年10月20日（火）

講師：順天堂大学内科准教授 永原章仁先生

日本人の5000万人はピロリ菌陽性である。そのピロリ菌が胃潰瘍のみならず胃がんの原因と分かってきた。

永原先生はいわばピロリ菌の専門家であり、ピロリ菌について非常にわかりやすく説明してくれた。ピロリ菌が強酸性の状態になる胃の中でどのように存在し、なぜ胃潰瘍や胃がんを起こす原因となっているのか、ピロリ菌にはサブタイプがあり、東アジアと西アジアでは異なること、さらにピロリ菌除菌が胃潰瘍の再発率を大きく下げることや胃がんの内視鏡的療法の後に除菌をした場合でも新たな胃がんの発生を6～7割下げることなどの臨床的に重要な話を多く聞くことができた。

また、除菌前の検査と除菌後の検査の注意事項や保険の適用など実際的な話もあり、非常に役に立つ講演会であった。除菌法の進歩により100人のピロリ菌陽性者は一次除菌で25人になり、さらに二次除菌で3人になり、さらにそれ以上の除菌法が考えられている。われわれ医療者は保険の縛りがあるものの、日本人から胃潰瘍、胃がん患者をなくすために積極的にピロリ菌除菌を進めるべきだと感じた。



左：永原章仁先生



右：河野龍太郎先生

▶「医療におけるヒューマンエラー対策」

日時：平成21年11月17日（火）

講師：自治医科大学教授 河野龍太郎先生

医療現場に限らず、どんなに機械化が進んだ会社でも工場でもヒューマンエラーはつきものである。今回の講演会のテーマはいつもの医学的な講演会とは違って医療現場におけるヒューマンエラー対策に関するものであった。

今回の講師の河野先生は自治医大のメディカルシュミレーションセンター長で医療安全学の教授である。ヒューマンエラーは人間が本来持っている特性と人間を取り巻く広義の環境がうまく合致していないために引き起こされるもので、原因ではなく結果であり、どんな優秀な人間でも起こす可能性があるということから出発する。

講演では、具体的なエラー対策とエラー対策発想手順、事例が提示された。手順の最初で「作業遭遇数を減らす：やめる」ではバイアルやアンプルからプレフィルドシリンジ製剤にすることで作業工程を少なくできる。また、ものの置き場所を100%設定することで、仕事の効率と安全性を向上させることができる。安全を優先させることの重要性や指差呼称、ダブルチェックを行うこと、また万が一事故が起きた時の対応まで具体的に示され、大変有意義な講演会であった。



一月二十二日（金）さくら市よし茶屋において新年会が行われた。二十五名の会員が参加し、有意義な情報交換の場となった。

新年会開催される



### 箒川列車転落事故と神野勇三郎

国道4号線を北に向かうと矢板市と大田原市の境界に箒川が流れる。この場所は切り通しを抜けるとすぐに鉄橋が架かっており、鉄道ファンには絶好の撮影ポイントとなっている。この箒川の鉄橋で今から約120年前に明治時代の鉄道史上最大の大惨事が起きた。明治32年10月7日夕方、大暴風雨(台風)の中、矢板駅を出発した列車が箒川に架かる鉄橋中央部に差しかかった所、強烈な北西の大風を真横から受けて客車7両、貨車1両が増水した激流に転落、そのうち4両はばらばらに打ち砕かれて流され、死者19名、重軽傷者36名の犠牲者を出す大事故となった。この事故の報が日本鉄道株式会社に入るや、宇都宮では臨時列車を編成し鉄道関係者、医師団、看護婦などの救護班などが現場に派遣された。当時の下野新聞号外によると鉄道囑託医であった宇都宮市の神野病院の神野勇三郎、県立宇都宮病院の院長や副院長が駆けつけ、負傷者26名は神野病院に送られて入院したと書かれ、神野は救護医として大活躍した。実はこの神野勇三郎の名前が大正9年の塩谷郡医師会総会に登場するのである。

神野勇三郎は『栃木県医師列伝(明治42年6月30日発行)』によると、慶応2年石川県生まれ、石川県七尾医学講習所および金沢医学校で学び明治20年医師免状を拝領。県立宇都宮病院勤務、知事の特選により帝国大学国家医学講習科に入り修了。日本赤十字社予防医、検疫医となり、明治25年10月の特別大演習に参加、日清事変には救護医として従軍。その後宇都宮で開業し外科手術の名声が広く知れ渡っていた。『宇都宮医師会史(昭和

61年3月31日発行)』では宇都宮繁盛記(明治31年発行)に「神野病院は池上町にあり、院長神野勇三郎、外科手術に長じ、評判大いによろしい」と記載されており、明治30年下野新聞の「名医大家投票」では外科でダントツの1位(2位の得票の約10倍)となっている。

ここでもうひとり鈴木火市という医師にも注目したい。鈴木の名前はこの列車事故の救済義金応募者(下野新聞)に宇都宮医師として出てくるが、神野と同様に大正9年の塩谷郡医師会総会にも登場する。また、佐野家文書にも大正6年の斎藤邦一郎の葬儀の際の弔電には塩谷郡医師会 鈴木火一と書いてある。しかし、明治40年の栃木県医師会名簿には鈴木の名前も神野の名前も全く登場しない。神野勇三郎は塩谷地区に出張所を持っていたのだろうか。また、鈴木火一は医師会には正式に所属せず、病院の勤務医あるいは病院の派出所の(雇われ)所長だったのではないだろうか。もしかしたら神野病院塩谷派出所(その存在は確認できないが)の勤務医だったのかもしれない。あるいは…。

ひとつの出来事や記録からいろいろと想像を巡らすことが出来るのが歴史を調べる楽しみのひとつである。もちろん、きちんと資料にあたって事実を確かめることの重要性は言うまでもないが。(担当:岡 一雄)



野崎側に建てられている慰霊碑